

明治期にみる現場施工監督者の立場*

— 「攻玉社土木科同窓会誌」の記述から —

The Construction Supervisor's episodes in the Meiji Era
 — From the account of the Kogyokusha alumni bulletin —

榊山 清人**、長谷川 博***

By Kiyoto MASUYAMA, Hiroshi HASEGAWA

Abstract: Kogyokusha Junior College of Technology played an important role in education for the middle-class technical experts in the Meiji Era. During that period, Kogyokusha had been producing the excellent graduates to public and private bodies in civil engineering field. Even now, it has been kept educating adults for that field. This bulletin is very valuable as historical material regarding civil engineering in the Meiji Era. And we may look into some details of the construction field in those days. Especially the construction supervisor's episodes are very interesting related to the current young engineers' nature and/or moral through the all generations.

1. はじめに

攻玉社は明治六大教育家のひとりである近藤真琴(近藤の他は福沢諭吉・中村正直・新島襄・大木喬任・森有礼)が江戸四谷坂町に文久3年(1863)に蘭学塾(近藤塾)を開いたのが発祥とされる。真琴は、明治6年(1873)にウイーンで開催された博覧会を視察し、日本が世界列強に肩を並べるために目標としている「殖産興業」のためには、欧州各国と同様に道路・鉄道・港湾・通信等の社会基盤を整備する必要があると考え、明治13年(1880)「攻玉社陸地測量習練所」を設置し土木技術者の教育を開始した。¹⁾ 陸地測量習練所が、量地饗になり、社会人を対象とした土木教育は明治31年(1898)から開始された。現在攻玉社工科短期大学環境建設学科として、平成10年(1998)で百周年を迎え、中堅土木技術者の育成にはかなり貢献してきた。(「土木史研究」にも長谷川ら²⁾によって数編発表されている。)

今日、公共工事についてはマスコミの影響などで国民の関心が高まりつつあり、「構造物をいかに早く、よいものをより安く」を目標におく施工管理の視点に立った場合、土木施工管理(監理)技術者は重要な役目を担っている。本稿では、「攻玉社土木科同窓会誌」の中で明治時代の現場施工監督者の立場で興味深いエピソードが記述してあるので当時の攻玉社および建設業の時代背景とともに紹介する。

* keywords : 現場施工監督者、明治期、攻玉社土木科同窓会誌
 ** 正会員 (財) 全国建設研修センター
 (〒100-0014 千代田区永田町1-11-32)
 *** 正会員 攻玉社学園本部
 (〒141-0031 品川区西五反田5-14-2)

2. 明治期の攻玉社

(1) 明治期の攻玉社以外の中堅技術学校

近代の土木技術者教育は、官立の高等および中等技術者の養成から始まり、次第に高等技術者を補佐する中堅技術者教育が私立学校を中心に始まっていった。明治期における私立の中堅技術者教育は、土木工学を主体に教えた攻玉社と土木および造家・機械等を教えた工手学校(現工学院大学)が有名であった。明治期設立の中堅技術者養成の学校を挙げると表1(攻玉社除く)のとおりである。³⁾

表1 明治期設立の中堅技術者養成学校
 (明治工業史土木篇を参考に榊山作成)

明治期の校名	現在の校名	創立年	創立者もしくは関係事項
工手学校	工学院大学	明治21年	工部大学校の卒業生が中心
岩倉鉄道学校	岩倉高校	明治30年	野村龍太郎・笠井愛次郎
岡山工業学校	明治に廃校?	明治34年	工業学校で、明治時代唯一の官立学校
関西商工学校	〃	明治35年	平賀義美・沖野忠雄・岡田信
東京高等学校	聖橋高校	明治36年	山下谷次
東亜鉄道学校	明治に廃校?	明治37年	土山兵
工学校	〃	明治40年	笠井愛次郎
日本工学校	〃	明治41年	大熊武雄
東京工学校	東京高等工業学校	明治41年	田岡忠次郎
中央工学校	中央工学校	明治42年	花和安年・松本小七郎

(2) 明治期の攻玉社のあゆみ

攻玉社の土木の始まりは創始者の近藤真琴が常々門人に「方今天下の青年は政治法律又は理財等の研究に走る者多く、船員とか土木技術者という方面はややもすれば卑しき嫌う傾向がある。しかし是等は我が国家の發展上是非必要なものであるから、名誉や金儲の事業は他の人に譲り、我輩同士の者は此の方面に大いに努力しようではないか」と語っており、この考えに基づいて明治9年、別科として陸地測量の授業が開始された。⁴⁾ 明治期の攻玉社のあゆみは表2のとおりで大正、昭和期を経て現在も短期大学として続いている。社会的には低くみられていた当時の土木従事者に着目した近藤の先見性はすばらしいものであったと思われる。

表2 明治期の攻玉社のあゆみ (攻玉社百年史より)

年月	関連記事
明治13年 6月	攻玉社陸地測量習練所開設
明治17年12月	陸地測量習練所を量地巒と改称
明治19年 6月	土木工学全科教育開始
明治21年 7月	量地巒を土木科として改称 第1回卒業生2名
明治23年10月	土木科の同窓会の発足、「土木同窓会誌」創刊
明治31年 2月	土木科夜間授業開始 (午後5時より)
明治34年12月	攻玉社工学校と改称
明治36年 8月	土木工学講義録発行 (通学ができない者に対して作成された)

(3) 土木科、工学校と改称後の学科目

明治21年、7月に土木科と改称するに当たり、規則を明文化し、目的も「土木科は土木学科の技手を養成するを以て目的とす 学科は土木学に関し必要なる者は悉く之を設け専ら実業に応用せしむるを以て主意とす」⁵⁾とあり、学科課程は表3のように予科・初級・中級・上級の4つに分かれ、各々6ヶ月合計2ヶ年で卒業でき、学期は8月21日に始まり翌年2月に終わるのを第一期、3月に始まり7月21日を終わるのを第二期とし、名実ともに、近代化した。

その後、明治31年には生徒の中に他の業に従事して

いたものが多数となり、夜間授業としたが、授業内容が異なることは全くなく、發展を続け、明治34年12月攻玉社工学校と改称し、教科目に建築法の一科目を増やした。さらに卒業生が高度の技術を修得するための高等科 (期間6ヶ月) を設置した。高等科設立当時の学科および事業時間数は表4のとおりである。

表3 土木科と改称 (明治21年) 頃の学科課程 (攻玉社百年史より)

科目	毎週時間	予科
数学	19	算術代數幾何三角術重学
算・製図	1	自在算
英語	4	読本音読訳解
科目	毎週時間	本科初級
数学	7	代數幾何三角術重学
土木学	4	構造法 (石工煉瓦木工基礎築造工)
測量	9	材料及結構強弱論 道路及鉄道論 経緯測量法羅盤測量法 真子午線測量大意磁針 偏差測量法大意 実測演習
算・製図	3	製図測量器械
英語	2	訳読
科目	毎週時間	本科中級
土木学	5	結構強弱論 道路及鉄道論 水理学 (静水動水)
測量	11	治水工学水道構築河川港湾橋梁論 経緯測量水準測量 鉄道測量法 実測演習
算・製図	2	製図測量器械
英語	2	訳読
科目	毎週時間	本科上級
土木学	3	水理学 (水道構築河川港湾) 橋梁論
測量	9	鉄道測量法 平板測量法 磁坑測量法 六分儀測量法 水上測量法 三角測量法 実測演習
算・製図	6	意匠及製図
英語	2	訳読

表4 高等科設立当時の学科および時間数 (攻玉社百年史より)

学科	時間数	科目
土木工学	6	構造および橋梁論、鉄道論、水理学
数学	4	代數、解析幾何、微積分
英語	2	読方、訳読、訳書

(4) 卒業後の進路

長谷川らの研究⁹⁾によれば明治20～30年代の卒業率は約40%で就職は表5のとおりである。明治30年の卒業生を見ると時代を反映してか、鉄道関係者が多くなっている。攻玉社出身者は、例えば攻玉社工学校明治34年6月の卒業生の回顧談によると「民間の重要な地位にいるものはほとんど攻玉社のものでした(中略)それでも兵庫県の県庁の地方出張所長はほとんどは攻玉社か工手学校でうめられていました。」⁷⁾とある。また、間組百年史⁸⁾では「この卒業生(攻玉社)下線は筆者加筆で当組に入組したものに茂松徳松、立田貞介、一ノ宮近蔵らがあり、また、当組からここに委託修業させた西岡謙三郎らの例もあって、当組との縁が深い学校である」とあり、攻玉社の卒業生が官民間問わず活躍していたことがわかる。

表5 明治20～30年代 攻玉社卒業生の進路
(土木史研究第11号 長谷川の調査より)

明治21年～22年 土木科(測量或科含む)卒業生 28名		
長崎務省鉱山局 5	東京府土木課 5	日本鉄道会社 1
大阪土木監督署 1	東京府水道助手 1	北海道炭坑鉄道 1
海軍水路部 1	東京市改正係 1	中山道鉄道 1
呉鎮守府建築部 1	埼玉県土木課 2	浅川組 6
海軍技手見習 1	秋田県土木課 1	(大和郡山)
(佐世保)		
明治30年2月～6月 土木科卒業生 41名		
内務省土木監督署 3	東京府庁 1	東京測量会社 2
仙台土木監督署 1	東京市庁 1	鹿島組 1
新潟土木監督署 1	大阪府庁 2	山陽鉄道 8
鉄道局 8	大阪市庁 1	近江鉄道 2
福島県庁 1	大阪市水道 1	七尾鉄道 1
埼玉県庁 1	長崎市築港 1	函館鉄道会社 1
		磐梯鉄道 1

3. 「攻玉社土木科同窓会誌」とは

(1) 発行の経緯及び内容

攻玉社土木同窓会は、明治23年金井彦三郎(量地 養 明治21年卒)が主唱し、堀内米雄(土木科 明治22年卒)、千賀順應(土木科 23年卒)、浜崎偵太(土木科 22年卒)が中心となって土木科同窓会結成をうち合わせ、同年10月5日新銭座の攻玉社講堂において発会式を挙げた。そして、それと表裏一体となって同窓会誌が発行された。同窓会誌は、ほぼ毎月27日に発行されており、その内容は、単なる会報としてだけではなく、卒業生の親交を計るのはもちろん、土木の最新情報や研究などを会員等に知らせる目的であったと思われる。また質疑応答の欄、卒業試験問題まで記載されている。⁹⁾

同窓会誌は大正6年第236号まで27年間続いたが、現在ではそのうちの第6号(明治24年3月)～第160号(明治38年1月)の所在が判明している。会員としては名誉会員(本校職員や東大等の教授)、正会員(攻玉社卒業生)、外員(卒業生以外)で構成されており、同窓会誌の組立としては「演説」「寄書」「講義」「叢話」等から構成されており、その中で、工事記録に関する記述は主に「叢話」(主な内容としては土木関係のその折々の話題)、「寄書」(主な内容としては、新知識の紹介、工事に関する計画書、仕様書、工事報告等)に記載され、特に工事報告などを見ると会員が全国的であり、他の会員に知識を提供するために各地の施工現場の業務内容を詳細に記してある。また、長編は連載形式で、現場の技術者としては非常に役立つと考えられる。また、われわれも当時の施工方法、施工管理方法を知る上でも大変貴重な資料である。当時の主な同窓会誌の工事に関する報告記事は表6のとおりである。

表6 主な同窓会誌の工事に関する報告記事
(「攻玉社土木科同窓会誌」より掛山抜粋)

同窓会誌の記事	投稿者	員種	同窓会記載年月
長崎水道	伊奈益人	正員	M24.7
御茶水橋建築工事概況	金井彦三郎	正員	M24.10、11、 M25.1
阪橋橋脚基礎工事	平原孝平	正員	M25.4
小樽港南濱町船入場築造工費仕様書	N. I.	正員	M25.6
常願寺川以西合口用水引入口工事	並河常太郎	正員	M26.1.2.4.6
横浜築港用砂、石、土炭岩、購入並運搬請負入札仕様書並約定條款	亀井重磨	正員	M26.9
千種川改修亀の甲堰堤取除工事	並河常太郎	正員	M26.8.9.10
吉野川改修工事	大崎由郎	正員	M26.12
東京市渡橋改築工事概要	金井彦三郎	正員	M28.7.8.9.11 M29.1
小樽港修築意見書	佐々木恒太郎	外員	M33.7.10、11
品川沼排水工事報文	佐々木恒太郎	外員	M33.12、M34.1
錦帯橋架換工事概要	小田一郎二	外員	M35.4
掛川水道工事計画書	吾孫子嗣一郎	外員	M36.6.7.9

(2) 「攻玉社土木同窓会誌」に登場する卒業生の略歴
同窓会は金井彦三郎が中心になって発足し、それに伴って同窓会誌も発行されたと先述しが、ここでは金井彦三郎(表7)¹⁰⁾、亀井重磨(表8)¹¹⁾、後述するエピソードを記載したたかぬき生こと竹貫直次(表9)¹²⁾の略歴を紹介する。また、東京帝国大学工科大学(以下「工科大学」と略称す)卒業生の若手内務省土木局職員との比較を行ってみたい。

表7 金井彦三郎の履歴
(金井彦三郎先生傳より作成)

1867(慶応3)年	8月18日	: 美濃国に於いて誕生
1883(明治16)年	5月4日	: 内務省衛生局報告課に臨時雇用日給35銭を給す
1884(明治17)年	8月	: 京橋にある豊国学校終了
1886(明治19)年	9月	: 攻玉社量地費に入学
1888(明治21)年	7月	: 攻玉社量地費を卒業
	8月31日	: 東京府庁土木科雇申付日給60銭を給す
1899(明治32)年	4月6日	: 東京市技師に任ぜられ十数俵を給せられる
1900(明治33)年		: 工務課長兼務を命ぜられる
		: 攻玉社土木科の教授に命ぜられる
1906(明治39)年	6月27日	: 任裁道技師叙高等官7等

表8 亀井重磨の履歴
(玉工同窓会報 昭和63年より作成)

1867(慶応3)年	8月9日	: 出石藩水(兵庫県)に於いて誕生
1884(明治17)年	9月5日	: 神奈川県雇申付候事
1891(明治24)年	8月13日	: 依願免職(横浜築港掛)
	8月21日	: 私立攻玉社専修土木科へ入学
1893(明治26)年	6月30日	: 当社所定の土木本科を全く履修して卒業せり仍て之を証す
	8月14日	: 東京市水道工手申付月給25円を給す
1897(明治30)年	4月2日	: 工手学校講師に從事許可
1904(明治37)年	12月27日	: 任東京市技師
1906(明治39)年	4月6日	: 依願免職(疾病) -東京都-

表9 竹貫直次の履歴
(玉工同窓会々報平成5年より作成)

1875(明治8)年	3月10日	: 石川町(群馬県)に於いて誕生
1892(明治25)年	4月	: 東京市攻玉社尋常中学校卒業
1894(明治27)年	2月	: 同社土木科卒業
	4月	: 東京湾築港調査掛申付 月給拾円ヲ給ス (東京市参事会)
	12月	: 依願免職掛
	//	: 雇員ヲ命シ月俸拾円ヲ給ス(陸軍省)
1895(明治28)年	1月	: 臨時測図部測図ヲ命ズ(陸軍省)
	2月	: 遼東半島へ出張ヲ命ズ(陸軍省)
	7月	: 帰朝
	9月	: 朝鮮へ出張ヲ命ズ
1896(明治29)年	4月	: 朝鮮ノ帰途台湾へ出張ヲ命ズ
	8月	: 帰朝
	9月	: 臨時測図部被雇員ヲ免ス(陸軍省)
1897(明治30)年	1月	: 東京市水道助手申付月俸拾五円ヲ給ス (東京市参事会)
1898(明治31)年	11月	: 依願免職掛
1899(明治32)年	12月	: 雇申付月俸拾円給与(第一区土木監督署)
	//	: 東京府技手(東京府)
1900(明治33)年	6月	: 依願免本官 -東京都-

略歴をみると金井は明治32年4月に32歳で技師に任ぜられている。しかし当時は、“大学卒業者でなければ技師になることができない”と言われていた時代であったことを考えると彼が技術者として優秀であったことがわかる。また、亀井は卒業と同時に明治26年に東京市に工手として月25円で採用されており、竹貫は東京湾築港調査掛として明治27年に月10円で採用されている。一方、高等技術者教育機関卒業者はどうかであったのであろう。“近代土木技術の黎明期における土木技術者”¹³⁾に明治24年の内務省土木局職員の当時の役職や年給が記載されている(若手技術者は全員「工科大学」卒)ので表10に記載する。

表10 明治24年当時の内務省若手技術職員
(「近代土木技術の黎明期における土木技術者」より)

第一区 (東京)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
高橋 運次郎	技師試補	明治24	600	50	
第二区 (仙台)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
香山 勝之助	技師試補	明治23	700	58	
第三区 (新潟)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
石田 石代	技師試補	明治23	700	58	
第四区 (大阪)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
丹羽 鶴彦	技師	明治22	700	58	
三宅 次郎	技師試補	明治23	700	58	
奥山 岩太郎	技師試補	明治23	700	58	
三池 貞一郎	技師試補	明治23	700	58	
鶴田 多門	技師試補	明治24	600	50	
井川喜久蔵	技師試補	明治24	600	50	
第五区 (広島)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
関矢 鈴吉	技師試補	明治24	600	50	
第六区 (久留米→熊本→福岡)					
氏名	役職	卒業年	年給(円)	月給(円)	
渡辺 六郎	技師試補	明治22	700	58	
長尾 半平	技師試補	明治23	600	50	

・月給については年給を単に12ヶ月で除し、小数点以下は切り捨てにした。

工科大学卒業の若手技術者と亀井の略歴では高等教育と中堅技術者教育の差や組織の違い、また時代の若干のずれで単純に比較することはできない。しかし、ある程度は当時の様子を知ることができる。例えば、亀井が技師までに要した時間は卒業後工事として任せられ約5年を経て技手に昇任し、更に約6年を経て昇任したのに対し、工科大卒は新卒で技師試補、早ければ丹羽勲彦(明治14年攻玉塾入塾、のち大正10年～昭和20年まで攻玉社高工校長・工博)のように約2年で技師に昇進している。また、ここでは記していないが退官までの役職などは相当高くなっていくのである。月給についても攻玉社出身者の約2倍であり、竹貫は8年後の明治32年に第1区土木監督署に採用されて20円程度であるから、この当時工科大学卒業者が相当のエリートであったことをうかがい知ることができる。

4. 明治20～30年代の建設業者

(1) 明治期の請負業者の地位

現存する「攻玉社土木科同窓会誌時代」(明治20年代～明治30年代)の建設業の時代背景をみるとまず、請負制度においては明治22年(1889)に会計法の公布があり、その業者の選定、請負契約の種類、請負契約の実務的な方法などが具体的に法令化され、それに伴い土木請負業の経営組織や体制も変わり始めた。また、土木工事も、旧来の不役による工事の施工から、工事施工の専門家である建設業者に依存する発注者が増加し、土木建設業者の市場は発展していった。なお、明治30年代までの主な建設業者の創始者は表11のとおりである。¹⁴⁾

しかしながら、建設業者の地位は、例えば、「につぼん建設物語」¹⁵⁾の文章を引用すると、“建設業者は、発注者がたとえ帝大の同期卒業生であっても、現場で肩を並べて歩くことはできず、また、鉄道局の原口要は、業者が部屋の敷居の中に入ってくるのも嫌い、当時の代表的業者である杉井定吉、志岐信太郎などでさえ、縁側で板張りの上に正座して原口に声をかけられるのを何時間も待った”ということであるから、一般の請負者はかなり低い地位であったことは想像できる。

表11 明治期創業の請負業者
(日本土木建設業史より)

創始者または創業時の名称	創業年	現在名
竹中謙兵衛(正高)	慶長15(1610)	竹中工務店
清水嘉助(包壽)	文化元(1804)	清水
鹿島岩吉	天保11(1840)	鹿島
佐藤助九郎	文久2(1862)	佐藤工業
岩崎甚平	明治元(1868)	岩崎建設
野村専太郎	明治2(1869)	野村工事
杉井定吉	明治4(1871)	現存せず。当時請負業者として最大
安藤庄太郎	明治6(1873)	安藤建設

大倉喜八郎	明治6(1873)	大成建設
島田藤吉	明治7(1874)	島藤建設
西松桂助	明治7(1874)	西松建設
酒井利右衛門	明治10(1877)	酒井建設工業
戸田利兵衛	明治14(1881)	戸田建設
勝呂平右衛門	明治15(1882)	住友建設
飛島文治郎	明治16(1883)	飛島建設
松尾安兵衛	明治18(1885)	松尾建設
銭高善造	明治20(1887)	銭高組
西本健次郎	明治20(1887)	三井建設
有限会社日本土木	明治20(1887)	現存せず。わが国最初の法人組織請負会社
帝国工業会社	明治20(1887)	現存せず。
明治工業会社	明治21(1888)	現存せず。神戸にて創業
井上保三郎	明治21(1888)	井上工業
間庭馬	明治22(1889)	間組
北海道土木会社	明治22(1889)	現存せず。北海道初の法人組織請負会社
北海道商會	明治22(1889)	現存せず。
住友別子銅山	明治23(1890)	住友建設
土木係		
森本千吉	明治23(1890)	森本組
札幌工請負会社	明治23(1890)	現存せず。
松本勝太郎	明治23(1890)	松本建設
若菜隆會社	明治23(1890)	若菜建設
地崎宇三郎	明治24(1891)	地崎工業
大林芳五郎	明治25(1892)	大林組
浅沼格之吉	明治25(1892)	浅沼組
伊藤龜太郎	明治26(1893)	伊藤組土建
荒井初一	明治27(1894)	荒井建設
松村雄吉	明治27(1894)	松村組
古久根秋二郎	明治28(1895)	古久根建設
加賀田勘一郎	明治28(1895)	加賀田組
水野甚次郎	明治29(1896)	五井建設
星野篤二郎	明治29(1896)	星野土木
中野喜三郎	明治30(1897)	中野組
森栄蔵	明治32(1899)	森組
菅原恒寛	明治32(1899)	鉄道工業
湖池忠次郎	明治33(1900)	湖池組
熊谷三太郎	明治35(1902)	熊谷組
逢沢組	明治35(1902)	逢沢組
梅林宇十郎	明治35(1902)	梅林建設
福田藤吉	明治35(1902)	福田組
新井久米次郎	明治35(1902)	新井組
村上雲松	明治38(1905)	大成建設(昭和21年合併)

(2) 明治期の請負方式

当時の施工方法の形式としては「直轄(施工)方式」、「直営方式」、「請負契約方式」に分類される。「直轄(施工)方式」とは、工事を企画した発注者自身が工事組織を支配下に置き、資材や使用機器類の調達から労働者の募集・管理までのすべてを行うやり方である。これに対して「請負契約方式」とは、建設業者が工事の完成を約束し、発注者はその完成物に対して代金を支払うことを前提にする方式である。また、「直営方式」とは「直轄方式」に請負色を加味したもので、これは、発注者が業者と労務提供だけの契約を結び、必要な労働力を提供させるものである。¹⁶⁾

「日本土木建設業史」¹⁷⁾によれば、日清戦争から明治末にかけては、鉄道工事が土木請負工事の64パーセントを占めていて、その他の工事(例えば河川、道路、港湾など)は、そのほとんどが内務省の直轄工事であった。

5. 「攻玉社土木科同窓会誌」にみる現場施工監督者の立場

(1) 施工監督者のエピソード

攻玉社土木科同窓会誌第158号明治37年10月27日発行の「漫録」欄に当時の現場施工監督者の立場が面白く記載されているので紹介する。

監督難

正員 たげぬき生

I. 板挟み (いたばさみ)

人世幾多の行路難中恐らく監督難ほど厄介なものなからう技師と請負師との間に挟まって、それはそれは云ふに云はれぬ其苦しみ!

『そんな事はない、是非遣らしてください』と技師は云ふ。それでも……と云ひ兼ねて、仕方が無いから『ハイ』と返事をして、実は少し詳しく、現場の事情をお話して、何とか御工夫を願はうと思つて来たのだが、何しろ技師の見幕が恐ろしいので、しぶしぶ現場へ引返して見ると、現場ではその帰るのを待ち兼ねて居て、

『如何(どう)しましたか?』

『如何(どう)と云つて、初めの設計通り遣つて貰わなければならない……』

『そんなことを仰しやつたつて、出来ない相談ぢやありませんか。』

監督の言葉は頗る弱いが、請負師の言葉は、頗る明瞭(はっきり)として居る。ここで大概のものは面喰つて了ふのである。

註曰 此監督殿頗る気の弱いお方と見へる。何程(いくら)技師の見幕が恐ろしいと云つても、云ふことを云はないでは困るぢやないか、それに第一、二進(にっち)も三進(さっち)も行かなくなつてから、技師の処へ飛んで行くやうな監督では、安心して任せて置けない。斯様(かう)いふ時に人の技量は表はれるので、月給の上らないのも、多くは此の辺に基くのである。

II. 鰻(うなぎ)の井(どんぶり)

或る監督殿、或る工事の監督を吩咐(いひつか)つて、現場へ出張して、さて午飯時(ひるめしどき)となつたから、弁当をつかはうと思つて、箱番へ行つて見ると、机の上に鰻の井(どんぶり)が一つ、しかも、ちやんと割箸に香の物、お茶まで添へて、喰べるばかりになつて居る。

此方はまだ青二才の、学校を出てから間も無い監督殿とんと様子が分らないから、怖いものでも避けるやうに、此鰻の井と遠く離れて、小さくなつて弁当を取出さうとすると、請負師は遣つて来て、

『どうぞ〇〇さん、それを召し上がつてくださいさア、どうぞ……私達も此処でご相伴しますから……』と、其鰻井を監督の前へ押しつけるやうにして勧めるのである。監督は迷惑して、

『いや、僕は弁当を持つて来ました。』

と断つたが、請負師はなかなか左様なことでは撃退されず、

『そんなことを仰しやらずと喰べてくださいな、折角取つたものですから、冷(ひ)えない中に……』

『それでも僕は……』

『貴郎は鰻はお嫌ひですか?』

『いえ、嫌ひでは……』

と云ひかけたが、断るには嫌ひと云つた方が!と思つたが、間に合はない、

『それぢや召上がつてくださいな、それでないと、私共も戴くことが出来ませんから……』

見れば成程、自分等の喰べる分も傍に取つてある。

『でも僕は……困る……』

『貴郎はお堅いすなア、何です鰻飯の一杯ぐらい、△△さんだつて、□□さんだつて何誰だつて、お昼食は皆な私共が……』

『え、彼の□□君が?』

請負師は得意の笑を含んで、

『左様ですとも!』

註曰 此監督殿、苦戦の程はお察し申すが、果して能く鰻飯を撃退し得しや否や、最後の一勺=彼の□□君が? =の口吻に照して見ても、頗る怪しいものである。併し世の多くの監督は、斯の如き経路よりして追々魔道に陥るのだ!嗚呼些細たる一杯の鰻飯!!思へば恐ろしい世の中である!!!

III. 始末書(しまつしよ)

不思議なもので始末書にも書き方がある、素より自分は始末書を出す程の不始末をしたのであるから、何も不平を云ふのではないが、其始末書の書き方によりて処分に軽重があるから恐れる。

技師が始末書を出せと云ふから、厄介な事になつたとは思ひながら、正直に其顛末を書いて、差出すと、技師は黙つて暫らくそれを読んで居たが、頓て內衣兜(ポケット)へ収めて了つて、

『今夜、家へ来い。』

と云つたざり、可いとも悪いとも云つて呉れない、仕方が無いから悄然と技師室を立去つて、心配で堪らないから夜になるのを待ち兼ねて、技師の家へ行つて見ると

『あんな書き方ぢやア不可(いけな)い。』

つて、座るが早いか技師は云ふ、不可いと云つてそれが事実なのだから、外に書き方はありやしないと云つて、其旨答へると、

『事実でも、あんな事を書いては、君は免職されるか如

何されるか分りやしないぜ。』

と云つて、其所謂始末書の書き方なるものを教はつて、それによって僕は纔に免職を免れたが、

其時若し技師が注意を興へて呉れなからうもんなら僕は今、如何なつて居るか分りやしない！

『ああ厭だ厭だ！！』

註曰 此監督殿、いやに悟つたものだ事実を事実のままて書くと、其罰重く虚構の始末書を出せば、事無く済む！それに就けても技師に可愛がられなくちや駄目だなど悪く感ずつて此監督、詔（おべっか）ることなくんば幸也、天は正直にして且つ勉強なるものに興すと知らぬいか！！

(2) 明治期の施工監督の立場とは

前述したエピソードの工事種別は判断できないが、文面から想像すると「技師」「請負師」という表現があり、地位的には「技師」より下位で「請負師」より上位なことがわかる。当時の施工現場監督は例えば「内務省直轄土木工事史略 沖野博士伝」¹⁹⁾によれば、直轄低水工事の場合には、その頃の現場には、学校出でない老練の属、技手が主任であつて、技師は本庁内に居た。とあり「攻玉社土木科同窓会誌」（明治26年10月27日発刊）の「長野県道路改修線大町街道工事」の記述には目下工事監督並びに測量として出張なし居るものは技手1名（主幹）土木吏員4名工手3名にして同窓会員なる丸山丈之助氏は土木吏員の1名にて第3区の四工場の監督し居る小生（岡村七五郎 外員）^{(注) 下線部は筆者加筆}は工手の1人にて測量に従事す。とあり、現場の監督者は役職的には「技手」程度の地位の者であつたと考えられる。

先述したが、工科大学卒業者は「技手」の役職には就いていないので、おそらくこの若手監督は中堅技術者養成学校卒業者と考えられる。

第1のケースでは現場施工者である監督が上司の技師に設計変更を誓願しに行きながら言い出せず現場に戻ってくると請負師にも文句を言われる話である。第2のケースでは新人監督が弁当を持参しているにもかかわらず、請負者側からうなぎどんぶりを用意され断れきれずに苦惱する話である。第3のケースでは始末書の書き方まで上司に指示される話である。いずれのケースも、当時の監督者の立場がわかり現代社会でも違和感のない話である。

(3) 学識者が望む現場初心技術者への注文

エピソードは、技手の経験もある竹貫の記述であるが、攻玉社との関わり深い原龍太博士（明治10年頃在塾・略歴表12）¹⁹⁾が「攻玉社土木科同窓会誌」第15、16号（明治24年12月、明治25年1月発行）の「叢書」欄に寄稿されているので要点を記す。ここでは現場で必要な心構え等を明治の初心土木技術者へ提言してい

る。

表12 原龍太博士の略歴

(大日本博士録(5)工学より作成)

1854 (安政 元)年10月15日	: 福島県で誕生
1873 (明治 6)年	: 慶應義塾に入塾
1875 (明治 8)年	: 開成學校に転入
1877 (明治10)年頃	: 攻玉塾在塾
1881 (明治14)年 7月	: 東京大學理學部土木工學科卒業 : 東京市に奉職
1886 (明治19)年10月	: 東京府技師に任ぜられる
1888 (明治21)年 3月	: 攻玉社草創の教授に就任
1895 (明治28)年 9月	: 第一高等學校講師に兼任せらる
1895 (明治29)年 9月	: 東京帝國大學工科大学講師に兼任せらる
1897 (明治31)年 2月	: 東京市改正委員被仰付
1898 (明治32)年 3月	: 工學博士會の推薦により工學博士の學位を受領す
7月	: 東京大學工科大学教授を兼任する
1907 (明治40)年 3月	: 官を併し横浜市水道局技師長兼土木事務顧問となる
1910 (明治43)年	: 横浜市を辞す

原博士寄稿（長文のため重要な部分だけ記載）の「初心土木學者に注意」では大きく分けて3つの点を述べている。

I. 実地を先にし理論を後にせよ

近頃会誌を閲読するに多くは是れ理論上の講談にして事の実地に適用し得べきもの稀なるは誠に遺憾とするところなり（以下略）

（要旨）机に座っていないで、現場にでなさい。

II. 自編の手帖を製せよ

前已に湛へたる如く経験を熟練とを得ること容易のたにあらず而して種々工事に就いて熟練、経験を亦得るも工事仕様の幾多なる日月の長久なる到底永年之を暗記すへきに非ず乃ち自ら手帖を編纂し専ら各種工事の注意すべき点例へは如何なる工事には如何なる事情を注意せざるへからず（中略）、常に之を携帯し（以下略）

（要旨）現場をみて、どんどんメモをとりなさい。

III. 経験

初心土木學者か土木工事に就いて経験と熟練とを得んには可成く多くの工場に到り些細に工事の仕様に付て研究すること専一なるへし煉瓦一枚の据え方、杭一本の樹又た決して軽々看過すへきに非らず而して若し心に会得せざることあらは之を監督者に就いて質すへし（中略）

（我国在来の土木工事に就き書籍として現存する者の中東京京橋区南伝馬町有隣堂の発兌に懸る土木工要録並に土木普要集と佐藤信淵翁著の堤防溝瀆誌は最も審なるものなれば一覽ありたし）（以下略）

（要旨）経験を補うためによく現場を見学し、理解できなければ質問をしなさい。また、必要な書物を読みなさい。

竹貫のエピソードは現場経験豊富な彼の体験からの若手への忠告であり、嘆きであるため当時の現場での様子や若手技術者に対する評価が生々しく伝わってくる。それに対して原博士の寄稿は、経験の少ない若手技術者に上を目指すために何をしなくてはいけないかということをおしなやとしてアドバイスをしている。これは、2人の歩んできた教育や職歴等の違いをそれぞれの立場で若手技術者に伝えているので興味深い記述である。

6. おわりに

「攻玉社土木科同窓会誌」の時代(明治20年～30年代)は、建設業界にとって法制度や組織面の充実など過渡期にあり、本会誌の竹貫エピソードは笑い話として記述されている。しかし、視点を変えてみると現代社会に通じる重要な問題である。例えば、第1のケースは気の弱い監督であるが、時代を超えて現在の施工現場の監督にも同じような立場にいる現場技術者は少なくないはずである。また、当時行政側の立場に弱かった請負師が若手監督にはハッキリと助言しているのも興味深い。第2のケースでは請負師がうなぎどんぶりを用意したというだけではあるが、さらに大きくなっていくと今日でもよく事件が起きている収賄や賄賂までつながる問題である。最後のケースは、上司である技師に始末書の文書の書き方まで注意される監督の話であるが、これがさらにエスカレートしていくと現在の言葉でいうイエスマンになる可能性があり、組織の上でも危険な状況になりかねない。阪神大震災後、公共工事について国民の関心の高まり、技術者の資質、倫理観等が問われている現在、このエピソードを単なる笑い話で読むのではなく、もう一度過去を振り返り襟を正していかなければならないと思われる。

謝 辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々にお世話になったことを心より感謝致します。

参考文献

- 1) 攻玉社工科短期大学：『攻玉社工科短期大学四十年史』, PP3, 1993年
- 2) 長谷川博：『明治期の攻玉社—亀井重鷹を中心として—』, 土木史研究第9号, PP79~87, 1989年、『明治期の陸地測量教育—攻玉社付属陸地測量練習所を中心として—』, 土木史研究第10号, PP143~150, 1990年、『明治期の攻玉社の土木教育』, 土木史研究第11号, PP. 289~299, 1991年、『明治期の測量用語』, 土木史研究第12号, 1992年、『明治期の攻玉社土木科同窓会誌—土木技術情報誌の一翼として—』, 土木史研究第15号, PP. 345~352, 1995年、『攻玉社土木科同窓会誌の測量関係記事』, 土木史研究第16号,

PP. 369~374, 1996年

3) 日本工業会編：『明治工業史土木篇(復刻版)』, 丸善, PP. 1112~1120, 1970年

4) 攻玉社学園：『攻玉社百二十年史』, PP. 28, 1983年

5) 攻玉社学園：『攻玉社百二十年史』, PP. 60~63, 1983年

6) 長谷川博他：『明治期の攻玉社の土木教育』, 土木史研究第11号, PP. 292, 1991年

7) 攻玉社学園：『母校の思い出』, 1963年

8) (株)間組：『間組百年史 1889-1945』, PP. 24, 1989年

9) 攻玉社学園：『攻玉社百二十年史』, PP. 70, 1983年

10) 攻玉社学園：『玉工第5号—金井彦三郎傳(抜粋)』, PP. 41~60, 1940年

11) 攻玉社学園：『玉工同窓会報』, PP. 16~17, 1988年

12) 攻玉社学園：『玉工同窓会々報』, PP. 16~17, 1993年

13) (社)土木学会：『付. 近代土木技術の黎明期における土木技術者』, 土木学会誌, PP. 279, 1979年

14) (社)土木工業協会・(社)電力建設業協会編：『日本土木建設業史』, PP. 1010~1012, 技報堂, 1971年

15) 建設業を考える会：『につぼん建設業物語』, 講談社, PP. 73, 1992年

16) (社)東京建設業協会編：『東京をつくった話』, 日本経済評論社, PP. 52~53, 1998年

17) (社)土木工業協会・(社)電力建設業協会編：『日本土木建設業史』, PP. 101, 技報堂, 1971年

18) 真田秀吉著：『内務省直轄土木工事略史』, 旧交会発行, PP. 103~104, 1959年

19) 国立国会図書館：『大日本博士録(5)工学』, P. 31~32, 1989年